

Hippophile

ヒポファイル

Apr. 2011 No. 44



特別記事

北海道大学馬術部の紹介

本城敬文

Hokkaido University Equestrian Team

Yoshifumi HONJO



本城敬文 (ほんじょう よしふみ)

1955年大阪府生まれ。1978年北海道大学獣医学部卒業。在学中は馬術部に所属。主な戦績は、北日本学生馬術大会総合競技優勝、全日本学生馬術大会障害競技団体2位。同年JRA日本中央競馬会に入会。

栗東トレーニングセンター競走馬診療所、馬事部、競馬学校、美浦トレーニングセンター競走馬診療所長、馬事公苑長を経て、現在、日本馬術連盟に勤務。

1. 北海道帝国大学乗馬会

大正13年(1924)10月「北海道帝国大学乗馬会創立委員会」が結成され、当時の情勢から軍事研究団体の一環として乗馬練習をしたい旨を軍部に請願の結果、第七師団長より軍馬借用許可を得て、翌大正14年(1925)1月、「北海道帝国大学乗馬会」発足となった。中村大尉を会長に三十名の会員が集まり、土曜に月寒第二十五連隊つきさっぽでの練習や旭川第七連隊での合宿などを行った。

2. 北海道帝国大学文武会馬術部

その後、北海道帝国大学「文武会」^{注1)}にも加入が認められ、昭和5年(1930)、東京大学馬術部出身の永井一夫教授を部長に、四十数名により「北海道帝国大学文武会馬術部」の誕生となった。練習は乗馬会時代と同じく第七連隊、第二十五連隊などで行われ、創立一年目の昭和5年(1930)「第七回全国高等学校馬術選手権大会」(インターハイ)で北大予科が2位となった。また翌昭和6年(1931)には、「第三回全日本学生馬術選手権大会」で東園基文が優勝、さらに翌年の同大会でも準優勝に輝いている。

昭和12年(1937)全日本馬術大会では石川正吉が学生障害優勝、学生団体でも北大が優勝した。昭和14年(1939)には、「第十六回全国高等学校馬術選手権大会」で念願の初優勝。全日本学生馬術選手権大会でも菅間威が、東園基文以来の優勝に輝くなど、学生馬術のトップを極めるに至り北大馬術部の名声は一気にあがった。

3. 櫻星会馬術部

文武会馬術部は、予科3年、本科3年、同好会の集合体組織であり、念願だった予科馬術部の独立は昭和15年(1940)2月に公認されて、「櫻星会馬術部」^{注2)}が



図1 旭川第七連隊での合宿風景 昭和2年3月撮影



図2 学内練習 昭和11年4月撮影

設立された。このことにより、インターハイなど高等学校の競技会を櫻星会の後援のもとに戦えることとなった。櫻星会馬術部は、昭和19年(1944)に戦火の影響で活動を中止した。

4. 北海道帝国大学報国会国防訓練部騎道班

当時の軍事体制強化の傾向が次第に強まる中、昭和16年(1941)2月、文武会が解消されて「報国会国防訓練部騎道班」と名前を改め、事実上の軍事教練の一組織として存続せざるを得なくなった。そして同年12月には、太平洋戦争に突入する。戦時下、一時は部員数も百数十名に達したが、第二十五連隊での週一回の練習もままならず、北部軍司令部、北部第六十三部隊、

あるいは北大農場での分割練習なども試みられた。しかし、戦火激しく昭和19～20年(1944-45)には、馬術部としての実質的な活動は休眠状態となった。

5. 北海道大学体育会馬術部

昭和20年(1945)8月に終戦を迎え、昭和22年(1947)9月に帝国大学は、新制大学として「北海道大学」に改称された。昭和24年(1949)5月には、法文、教育、理、医、工、農、水産学部を設けた総合大学として生まれ変わる。ようやく世の中も落ち着きを取り戻した昭和26年(1951)9月、スポーツ団体として「北海道大学体育会馬術部」の復活が実現した。練習は札幌競馬場、札幌乗馬クラブの好意のもと、週三日の練習日確保が可能となった。

6. ポプラ並木第一農場

昭和29年(1954)、第九回国民体育大会が札幌で開催された。当時の大会は、出場する乗馬を開催地が準備する(貸与馬)競技種目が中心だった。札幌国体の開催終了後、北大学長の島善鄰氏、馬術部第四代部長の太秦康光氏うずまさなどから当局への請願もあって札幌国体



図3 ポプラ並木馬場内で講習会 昭和37年撮影



図4 手入れ風景 昭和45年撮影

が用意した貸与馬(20頭)の中から6頭を北大が購入することになった。

以前から第一農場で学生実習馬として飼育されていた2頭とあわせて8頭が馬術部に託され、永年の自馬繋養の夢が実現した。あわせて厩舎、部室も第一農場内の施設を借用することになり、自前の管理体制が一気に整った。

こうした経過から、用具を収納する馬具庫も、昼なお暗い古いコンクリートサイロの転用だった。馬場は第一農場の農業実習馬場(ポプラ並木馬場)を利用することになった。

この札幌国体の6頭の自馬の実力は見事だった。札幌国体の翌年、昭和30年(1955)の第十回川崎国体で北大が初めて自馬出場し、ヨシタカ号(後の北嶺号)が六段飛越(宮澤 寛)で3位、大障害(大久保利彦)でも5位に入賞。同年および32年の全日本馬術大会では六段飛越(大久保利彦・樋口正明)に2位入賞した。さらに昭和34年(1959)の東京国体の六段飛越(森本 悌次)では、全国でただ一頭170cmを完飛して優勝。つづいて昭和35年(1960)熊本国体の成年障害(大場善明)も優勝し、六段飛越(千葉祐記)には3位入賞している。

また同時に入厩した北楡号は、昭和33年(1958)の富山国体の総合馬術競技(千葉幹夫)で優勝。同年、中京競馬場で開催された「第一回全日本学生馬術自馬大会」(現在の全日本学生賞典馬術大会)では障害(千葉幹夫)の2位、総合馬術(同)の3位に入賞した。

その他にも、北斗号(S29札幌国体の中障(岡田光夫)4位・総合(鎌田正人)7位、S30全日本の中障(鎌田正人)4位、S32全日本の中障A(岡本 洸)8位並びに総合(同)8位)、北標号(S32全日本の中障A(生田勝一)5位、S33富山国体の大障害(同)4位、S34東京国体の大障害(佐伯雄二)4位、全日本(原邦男)の六段6位)など粒ぞろいの北海道産・優駿たちだった。

一方、戦後再開された北大馬術部の活躍は、自馬だけではない。当時、各大学の自馬保有はまだ数少なく、対抗戦で学生日本一を決めるのは、貸与馬形式の「全日本学生馬術王座決定戦」だった。全国5～6ブロックの地区優勝校が、東京馬事公苑で王座を競っていて、昭和37年(1962)の北大チームは、この「王決」をも

制覇している。

さらに昭和34年10月には北大馬術部東京OB会が、昭和40年3月には札幌で北大馬術部後援会が結成され、卒部生や特別協賛会員による全国規模の支援組織が発足した。平成22年12月現在、後援会は、東京OB会145名、道内後援会101名、その他107名で合計353名が会員となっている。東京、札幌では毎年総会を開催するとともに会費を集め、現役部員の活動をバックアップしている。

《東京オリンピック総合馬術日本代表》

昭和33年に北楡号に騎乗していた千葉幹夫は、日本中央競馬会に入会後、昭和39年(1964)の東京オリンピックでは、総合馬術競技初の日本代表として活躍した。総合馬術に出場した他の3人は失権したが、千葉選手のみ完走し個人で34位に入った。この後フランス国立騎兵学校「ソー・ミュール」に留学、帰国後後進の指導に当たり現在も岩手県馬連で活躍されている。

7. 18条第二農場

昭和42年(1967)、馬術部の所属が、第一農場から学生部に移管されることとなり、同時に馬場移転問題が一気に表面化した。老朽化していた第一農場の建物の取り壊し改築が決まり、昭和46年(1971)11月、第二農場牝牛パドック跡の「18条馬場」に移転した。新設の「18条馬場」の北側には重要文化財の「モデルバーン」が隣接しており、近くの民家から砂ぼこりに苦情が出るなど、何かと使い勝手に制約も多い場所であったが、ポプラの綿毛舞う新天地で部員たちは一層の練習に励んだ。

この「18条馬場」で育った自馬たちは、スターライト号(全日本S51中障害(長屋清隆)優勝、全日学S49・S52(添田昌一・長屋清隆)障害優勝、S55には日馬連功労馬表彰)、ドンホッパー号(全日本S52パルクール(山本裕介)3位、S54中障(高橋均)優勝、S57鳥根国体の総合馬術(増田美希夫)4位、全日学S53障害(中島孝幸)5位、S56障害(増田美希夫)2位、S57障害(同)6位などのほか、日馬連S55、S57の内国産優秀馬表彰、全日学S53、S56、S57の優秀馬表彰)、疾風号(全日学S50総合(柴沼俊)9位)、北皇子号(全日学S60総合(町田憲司)9位)、日馬連H6功労馬表彰)、北玲号(全日学S63総合(加藤ゆう



図5 東京五輪総合馬術の「障害飛越 余力審査」での千葉幹夫選手。乗馬は「真歌号」(中半血6歳)。



図6 完成した18条厩舎 昭和46年撮影

こ)5位)、北駿号(福岡国体H2総合(堀崎敬史)7位)、明日檜号(全日学H5障害(松原貴史)5位)、などが活躍していた。

また、団体成績も優秀で、全日本学生障害は昭和49・50・51年4位、52年2位、同総合は63年3位であった。

8. 23条馬場

「18条馬場」は、北大内部の問題で移転したが、今度は外部事情で移転を迫られることになった。環状自動車道路「エルムトンネル」が「18条馬場」を通過するという札幌市の北18条道路整備計画が示されたためである。移転計画は難航したが、平成11年(1999)3月1日に「北23条馬場」は竣工した。

平成23年2月現在、「23条厩舎」には「13頭」の北大自馬が繋養されている。最も新しい馬は、平成22年9月入厩の「ハートロック号」で、132番目の自馬となる。北大馬術部も「帝大乘馬会」から86年目、「帝大文武会馬術部」から数えると81年目となる。



図7 23条馬場と部室、厩舎全景 平成11年撮影



図8 18条から移設した時計台

北大と学生馬術界

北大馬術部の前身である北大乗馬会創立の大正末期は、馬術部のある大学の数も少なく、自馬を持った部は僅か多くは軍隊の馬で練習し、競技会も陸軍士官学校、習志野騎兵学校等の施設の提供を受けていた。当時、高等学校にも馬術部のあるものがかなりあって、「全国高等学校馬術競技会」が東京帝国大学馬術部主催のもとに大正14年から毎年、陸軍大学で開催されていた。北大予科は昭和5年「第7回大会」（出場校は20校）から昭和17年の「第19回大会」まで出場している。

第1回七帝戦は北大が優勝

「国立七大学（旧七帝国大学）定期戦」は、現在は他の競技種目も各大学持ち回りで開催しているが、馬術競技は昭和12年に「第1回」が学習院馬場で開催され、北大が優勝した。以来、戦時中の数年間は中止されたが、昭和27年から復活して現在に至っている。

北日本地区学生馬術の発展

北海道では昭和17年に「帯広畜産大学」（当時は高

等獣医学校）、昭和37年に「酪農学園大学」、「北大水産学部」（函館）、昭和48年には「北海道工業大学」にそれぞれ馬術部が創立された。東北地区にも「東北大学」を筆頭に、岩手、岩手医科、東北学院、福島、弘前、秋田の諸大学に馬術部が設立され、北海道を含めた北日本地区の学生馬術活動も次第に活発になってきた。そこで「東北、北海道学生馬術選手権大会」が昭和27年から開催され、「第一回大会」は北大に於いて、岩大、岩手医大、帯広畜大、北大が参加して実施。以後昭和40年「第14回大会」まで北大、岩大、福島大、東北大、帯広畜大等の各大学に於いて開催されて来たが、昭和40年「北日本学生馬術連盟」が結成されてからは、「北日本学生馬術大会」に併せて開催することになった。

真の全日本学生王座決定戦

昭和30年度は北大馬術部が出場したすべての公式戦に全勝する戦後の最盛期を迎えながら、学生馬術の全国的大会がないために「日本一」を競う機会がなかった。当時は関東学生馬術協会、関西学生馬術連盟、東京六大学などの組織はあったが全国的な組織がまだなかった。それにもかかわらず関東地区と関西地区の間で「全日本学生王座決定戦」の名称で、昭和26年から大学日本一を決めていた。

北大馬術部は、昭和30年の日本馬術連盟主催の「第1回学生馬術講習会」でこの大会を真の全国大会にすることを強く主張した。昭和32年12月、全日本学生馬術連盟が創立されて、ようやく同連盟主催のもとに真の学生日本一を決める「全日本学生馬術王座決定戦」（王決）が行われることになった。

「王座決定戦」の名称は昭和42年で廃止され、昭和43年からは三種目競技会「全日本学生自馬大会」（のちの「全日本学生賞典馬術競技大会」、「全日本学生馬術三大大会」）として実施されている。

北大主催だった全日本女子学生馬術大会

北大馬術部は昭和33年に「第1回招待全日本女子学生馬術大会」を開催し、昭和39年の「第7回」まで北大馬場を会場として実施した。「第6回大会」には青山学院、麻布獣医、明治、岐阜、学習院、東北、福島、鹿児島、早稲田、帯畜、北大の計11校が、また「第7回」には熊本、岡山、岐阜、名古屋、早稲田、中央、

福島，岩手，酪農，帯畜，北大の11校が参加し，この大会が母体となって昭和40年から全日本学生馬術連盟の主催で「全日本学生馬術女子選手権大会」が開催されるようになった。

功労者・功労馬

日本馬術連盟功労者

北大馬術部の卒部生は文武会馬術部発足の昭和5年から数えて平成22年までに430名（未確認の予科馬術部，水産馬術部のみの部員は含まれていない）になる。部長として活躍された方を含め，社会人となってからも馬術の発展に貢献した者も多く，日本馬術連盟からの功労賞授与者を8名輩出している。

- 1) 昭和45年度 太秦 康光（北大馬術部第四代部長）
- 2) 平成3年度 半澤 道郎
（北大馬術部第六代部長・S8卒）勲三等旭日中綬章
- 3) 平成7年度 岡田 光夫
（前北大馬術部監督・S17卒）瑞宝小綬章
- 4) 平成9年度 宇都見千之助
（栃木県馬術連盟・S21卒）
- 5) 平成12年度 鎌田 正人
（北海道乗馬連盟・S30卒）
- 6) 平成13年度 斎藤 善一
（北大馬術部第九代部長・S28卒）
- 7) 平成17年度 八木 正巳
（北海道乗馬連盟・S39卒）
- 8) 平成19年度 東園 基文
（北大馬術部東京OB会名誉会長・S9卒）
従三位勲二等瑞宝章

日本馬術連盟功労馬

北大の自馬の歴史は昭和18年に小樽の軍用保護馬を500円で共同購入したようらく環珞号から始まり，現在までに132頭を数える。

現在の自馬はサラブレッドが主流であるが，戦後の昭和30年代までは「アラブ」「アングロアラブ系」「アングロノルマン系」「 Trotter」「中半血」などの馬たちもいた。彼らは戦時中の軍用馬として日高，十勝，釧路などで生産され，戦後は競走馬として地方競馬で走ったり，農耕使役馬などにも活躍した末裔かと思われる。

北大繋養馬の名前に「北」を冠するようになったの

は，昭和31年4月からである。北大らしい名前について，「恵廬寮歌から探す」とか，「北海道の山や地名を当てはめる」などの案もあったが，一部の馬を除いて「北」に統一された。

全国レベルの競技会（全日本学生，全日本，国体）に出場した馬は，45頭で以下の5頭は日馬連の功労馬表彰を受賞している。

- 1) 昭和48年度 北環号
- 2) 昭和55年度 スターライト号
- 3) 昭和59年度 ドンホッパー号
- 4) 平成6年度 北皇子号
- 5) 平成8年度 明日檜号

北大方式の模索

北大馬術部の歴史には好不調の波があり，昭和5・6年，昭和12～14年，昭和30～37年，昭和49～54年，昭和60～63年は好成績を挙げることでできた時期であった。近年は中央とのレベルの差が開く一方であるが，何とか追いつこうと模索が続いている。

北大馬術部では，岡田光夫氏（S17卒）が昭和38年から平成6年までの32年間，歴代唯一の監督である。過去から現在に至るまで，卒部後も在学している若いOBや在札のOBなどが技術指導や新馬調教を担当し部員の指導も実施することはあるが，正式なコーチは，昭和30年代に岡田光夫氏，40年代に小栗紀彦氏などが就任していた一時期しかない。伝統的にOBの関わり密度は小さく，現役部員は，自分たちで最良の方法を模索しながら格闘してきた。学生自らが自分たちで考え行動することは非常にすばらしいことである。しかしながら，北大馬術部には経験者の部員は非常に少なく，調教方針や若手部員の指導方針などに的確な指針を立てることに非常な困難を伴う。そこで，先代の方法と馬術書を参考に毎週のように勉強会を開き議論した。考え方の違いでOBと気まずい関係になったこともある。また，現役は1年ごとに代替わりするため，その方針が継続されとは限らず，中長期スパンで計画しなくてはならない人馬の養成に一貫性がなくなり不都合が生じる危険性も高い。わが馬術部が継続して好調期を維持できない原因のひとつがここにあると思われる。活躍している中央の大学馬術部には，強力な指導者がいて腕を振るっているところが多い。

前述のように，経験者の部員が非常に少ないため，

幼少期からの豊富な経験を有する部員の多い中央の馬術部には、技術では到底かなわない。そこで特に経験と技術を必要とされる馬場馬術での勝負は諦め、障害、総合に活路を求めている。

戦後の黄金期を支えた馬たちが去ってから、しばらく低迷期が続いた。この頃、元陸軍習志野騎兵学校教官でイタリア留学してイタリア式馬術を習得し、国際競技でも活躍した今村安氏（ロスオリンピックを西大尉騎乗で優勝したウラヌス号を見出した）の門下生である岩坪徹氏（東京オリンピック障害馬術候補選手）が、昭和38年から41年まで札幌勤務のため札幌乗馬倶楽部で乗っておられた。当時の馬術部はこのイタリア式馬術の導入に今後の命運を託した。しばらく大きな成果は挙げられなかったが、昭和49年のスターライト号の活躍により一時代を築くことが出来た。その後イタリア式馬術の影響は徐々に薄まり、60年代にはその伝統を残しつつもほとんど影を潜めることとなった。昭和62年頃から積極的に中央の講習会に参加したり、指導者の指導を受けるなど交流を深める流れになっていった。

現在の活動状況

平成23年2月現在、3年生3人、2年生8人、1年生11人、合計22人（男女とも11名）が13頭の馬で活動している。

練習がないのは月曜のみで、火～日曜はおおむね以下のタイムスケジュールとなっている（日曜の練習は9：00から）。

5：00～8：30	朝練習（集合、装鞍、騎乗、手入れ）
12：20～12：40	昼当番（飼い付け、寝糞返し）
16：30～18：00	夕方番（引き馬、手入れ）
21：00～21：10	投げ草（男子は泊まり）

外乗（街乗）

北大は札幌市内にあり、広大な敷地内に農学部の実験農場を含めほとんどの学部ならびに関連施設が集約されている。馬術部の馬場は現在敷地内の北端に位置しており、道路を挟んで北側は、住宅地である。以前は、馴致を兼ねて馬場の外で外乗（街乗）することも容易であったが、最近は住宅地への立ち入りが不可能となったりと制約が増え、行動範囲が構内に限定され



図9 朝練で構内外乗

てしまった。過去には騎乗して隊列を組み北海道神宮に初詣にいたり、定山溪（札幌の南西）や茨戸（札幌の北、石狩浜方面）に遠乗会に行ったりした。いまでは、事前に警察の許可を取り、夜明け前に大通公園の雪祭り会場に行くことが唯一となっている。

合宿

合宿は年に4回あり、5月の新歓合宿、夏の日高合宿、年末年始の冬合宿、3月の合宿である。5月の合宿では、新入生が馬術と部活動の基礎を教わる。日高合宿では、1年生が北大の日高実験農場で農作業を手伝い実験馬で騎乗訓練する。3月合宿では、親交のある乗馬クラブなどに数人ずつ武者修行に行く。

バイト

馬の飼料費や装蹄費などの費用をまかなうため、アルバイトは不可避である。北海道ならではの農場のアルバイトで、現金の代わりに牧草を得ることもある。最大の収入は、札幌競馬でのアルバイトである。昭和30年代には一流ホテルでダンスパーティーを開催して収益を得たこともあった。

北大馬術部讃歌

作詩 三浦 清一郎 S39卒
作曲 滝沢 南海雄 S40卒

はるきたれば だいちひかゝる
 春来たれば、大地光る
 銀の遠山、夢花々たり
 高らかに 今ぞ願けり
 われら駿馬のほまれあり
 春来たれば、大地光る
 銀の遠山、夢花々たり
 高らかに 今ぞ願けり
 われら駿馬のほまれあり
 春来たれば、大地光る
 銀の遠山、夢花々たり
 高らかに 今ぞ願けり
 われら駿馬のほまれあり

北大馬術部讃歌

一、
 春来たれば、大地光る
 銀の遠山、夢花々たり
 高らかに 今ぞ願けり
 われら駿馬のほまれあり

二、
 時来たれば 旗をかざせ
 青狼の旅路に 意気軒昂たり
 高らかに 今ぞ願けり
 われら駿馬のほまれあり

三、
 雪流れて 旅路遙か
 青春の孤杖 泥濘はばめど
 強然と 進みて行かむ
 駿馬のほまれあるかぎり
 われら駿馬のほまれあり

図10

馬術部讃歌は昭和38年に誕生し、以来コンパでの定番であり、北大寮歌としても歌い継がれている。

北大水産学部馬術部

北大は、札幌にほとんどの学部が集中しており、馬術部の活動も札幌が中心であるが、水産学部のある函館でも部活動を行っている。水産学部生は、札幌で1年半の教養課程を終えてから函館キャンパスに移行するので、1年生から馬術部員であった者と、函館移行後の2年生の後半以降から入部する者が混在する。水産学部馬術部は昭和37年に創立されたが、札幌から4年間部活動を継続できる者が毎年コンスタントにいるわけではない。自馬を保有して活動していた時期（3期3頭）があったものの、部員数の減少とともに休部を余儀なくされた時代もあった。現在は約17名（3年生11人、4年2人、院生4人）の部員が、自馬を持たずJRA函館競馬場で活動しており、本学や岩手大との交流戦、北日本学生選手権出場を行っている。



図11

北大馬術部のエンブレムは中世の騎士をかたどっている。東園基文氏が、昭和7年にドイツ誌ザンクトゲオルグを参考にして作成したもので、代々ジャージや卒部記念のペナントに使用されている。

S37～39	(1962～64)	北海道大学水産学部馬術部 創立～休部
S42～?	(1967～?)	日本中央競馬会函館競馬場にて活動～休部
S49～58	(1974～83)	初めての自馬(49～54)を保有し、競馬場でも活動
S58～H3	(1983～91)	東山乗馬クラブにて活動
H3～4	(1991～92)	高村牧場にて活動
H4～5	(1992～93)	東山乗馬クラブにて活動～休部
H12～現	(2000～)	JRA 函館競馬場にて活動

本稿は全面的に北海道大学馬術部ホームページ <http://hokudai-horse.xsrv.jp/index.html> の文章、写真、資料を参考とした。

写真提供

- 図1, 2, 3, 4) 北大馬術部創立四十年記念写真集(昭和49年7月刊行)
- 図5) 「東京五輪 馬術競技アルバム」(第一出版)
- 図6) 部報 昭和45年度 第6部
- 図7, 8, 9) 北海道大学馬術部ホームページ

脚注

注1) 「文武会」：札幌農学校時代の学生・教員・卒業生からなる「学芸会」と、体育会系団体の「遊戯会」が明治34年(1901)に合併し「文武会」となった。
 「北大の125年」北海道大学125年史編纂室編 平成13年刊
 注2) 「櫻星会」：予科の独自性を高め団結を図る目的から、明治44年に設立された教師・学生が一体となった親睦団体。
 北大庭球部100年小史(100周年記念誌投稿)

馬場周辺航空写真



〒001-0023 札幌市北区北 23 条西 12 丁目
 電話&Fax: 011-737-1626
 E-Mail: hokudaibajutubu@hotmail.co.jp
 地下南北線「北 24 条駅」2 番出口を出て
 西(左)方向へまっすぐ徒歩約 15 分

Google Map より

馬場は 60 m × 約 139 m
 移動柵で区切る

水色破線内は北大構内

Google Map より

表1 北大馬術部が最大の目標としている北日学と全日学の平成元年以降の成績

北日本学生馬術大会				全日本学生馬術大会			
1989 (H1).8.4-7	北里大	総合 馬場	3位 優勝 4位	仲村秀喜 (北銀号) 仲村秀喜 (北槍号) 中戸川周子 (北槍号)	10.31-11.5	障害 二走目失権	総合 耐久乗権
1990 (H2).8.8-12	帯畜大	障害 総合 馬場	優勝 優勝 4位	福庄亮逸 (北皇子号) 堀川環樹 (北玲号) 真鍋いづみ (北玲号)	11.6-12	障害 24位	総合 24位
1991 (H3).8.8-12	北里大	障害 総合	優勝 優勝 3位	高村理香 (北皇子号) 横山 勉 (北銀号) 堀川環樹 (北玲号)	12.10-16	障害 二走目失権	総合 30位, 耐久失権
1992 (H4).8.6-10	帯畜大	障害 総合	5位 3位	長谷川崇 (明日槍号) 祝前伸光 (北駿号)	11.11-15	障害 35位	総合 余力失権
1993 (H5).8.5-9	帯畜大	障害	3位	松原貴史 (明日槍号)	11.10-14	障害 5位 松原貴史 (明日槍号)	
1994 (H6).8.4-8	北里大	総合 馬場	2位 4位	黒崎雅人 (北銀号) 河合由枝 (北瑛号)	12.7-11		総合 失権
1995 (H7).8.8-13	帯畜大				10.31-11.5		総合 28位
1996 (H8).8.8-12	北里大	障害 総合	3位 5位 4位	中村晃史 (明日槍号) 池田智義 (北駿号) 池田智義 (北駿号)	10.31-11.3	障害 44位, 51位, 失権	総合 24位, 26位, 44位
1997 (H9).8.7-11	帯畜大	障害 総合	2位 5位	池田智義 (北駿号) 亀山 巖 (北凌号)	12.10-14	障害 59位, 失権, 失権	総合 耐久失権
1998 (H10).	北里大	障害	4位	小谷友也 (北獅号)	11.24-29	障害 55位	
1999 (H11).8.4-9	ノーザンホースP	障害 総合	2位 4位	大崎智弘 (北蘭号) 尾崎哲浩 (北旋風号)	11.3-7	障害 39位, 42位, 失権, 失権	総合 44位
2000 (H12).8.3-8	原町馬事公苑	総合 馬場	4位 4位	山本裕己 (北凌号) 国井千恵子 (北陽号)	11.1-5 10.31-11.3	障害 失権, 二走目棄権 障害 二走目失権	総合 耐久失権
2002 (H14).8.9-15	原町馬事公苑	障害	4位	木村滋之 (ウッドバイン号)	11.10-17	障害 失権, 失権	総合 29位
2003 (H15).8.8-13	ノーザンホースP	総合	5位	竹田敏宏 (北旋風号)	11.5-9	障害 46位	総合 12位, 35位, 42位
2004 (H16).8.7-11	原町馬事公苑	障害 総合	2位 3位 5位	前田晋也 (エルグレイ号) 一色真明 (北慧号) 一色真明 (北慧号)	11.2-7	障害 失権, 失権, 失権	総合 37位
2005 (H17).8.4-8	ノーザンホースP	障害 総合	3位 3位	前田晋也 (エルグレイ号) 一色真明 (北慧号)	11.2-6	障害 46位, 失権, 失権	総合 調教審査NC
2006 (H18).8.30-9.3	南相馬市馬事公苑	障害	4位	一色真明 (北慧号)	10.31-11.5	障害 22位	総合 42位
2007 (H19)	ウマインフルエンザのため開催中止				10.30-11.4	障害 27位, 失権, 失権	総合 耐久失権
2008 (H20).8.20-24	南相馬市馬事公苑	障害 優勝		山川倫明 (エルグレイ号)	10.31-11.5	障害 38位, 失権	総合 耐久乗権
2009 (H21).8.27-31	ノーザンホースP	障害 総合	3位 1位	野村基雅 (北翔号) 出戸裕人 (北慧号)	10.31-11.5	障害 38位, 失権	総合 余力失権
2010 (H22).8.26-29	南相馬市馬事公苑	障害 総合	2位 3位 (障害団体2位) 2位	山本栄輔 (北翔号) 平芳悠人 (北焔号) 出戸裕人 (北慧号)	10.23-27	障害 50位, 失権, 失権	総合 22位

北日本学生馬術大会は5位以内の成績のみ記載

全日本学生馬術大会は全ての人馬の順位を記載